

ランチョンミーティングの紹介  
—金属材料分野での多様なキャリアパス—

2015年3月20日 (金)

東北大学金属材料研究所；特任准教授 梅津理恵

男女共同参画委員会では、日本金属学会、日本鉄鋼協会合同で、2006年3月の春期・春季大会において、学会期間中の託児室設置を開始し、2007年3月より共同で委員会活動を行うようになりました。その後、シンポジウムの開催、「女子高生夏の学校」に参加等、金属材料分野で男女ともに活躍できる環境を作るための活動も行っています。委員会は年に2回、学会期間中に開催し、現在、日本鉄鋼協会から7名、日本金属学会から13名の計20名で構成されています。ランチョンミーティングは2009年3月より春期・春季大会の最終日の昼休みに開催してきており、金属・材料工学を学び、様々な分野の企業や大学で仕事をする先輩方にキャリアの積み方、プライベートと仕事の両立などについて講演をお願いしています。「金属材料分野での多様なキャリアパス」と題したこの会も、2015年春期・春季講演大会で第7回目となり、今までに9名の講師をお呼びしてきました。今回は、TMS Young Leader として金属学会に参加したワシントン州立大学・Associate Prof. Qizhen Li (タイトル“Women Scientists and Engineers in USA”) とエイチシースタルク社・テクニカルマーケティング・アジア・マネジャーの宮下直子氏 (“Strength as being a Female Workforce in Technical Field-Personal point of view”) のお二人に講演をして頂きました。

Dr. Liは中国で修士号を取得後に博士課程進学の際に渡米。オハイオ州立大学で材料工学の分野で博士の学位を取得後、ノースウェスタン大学で博士付研究員、ネバダ州立大学で助教・准教授、そして現在の所属、というようにアカデミックの分野で着々とキャリアを積んできました。金属学会の講演では「カーボンナノチューブ強化Mg複合材料の組織観察」に関する講演をされましたが、こちらのランチョンミーティングでは、科学者だけではなく、理系の技術者も含めたアメリカにおける男女共同参画の現状についてお話頂きました。

ワシントン州立大学における学生数や教員、技術職員に占める女性の具体的数値の紹介があり、大学ではポジティブアクション等の導入があるものの、上位職になるにつれ女性の割合が減少するという、日本と共通の問題を抱えていることが伺えました。しかしながら、米国においては単に男女共同参画に関する問題だけでなく、人種や宗教等の背景も絡むことから状況はより複雑であることが浮き彫りとなりました。

宮下直子氏は高校卒業と同時に渡米し、ワシントン州立大学で化学を専攻して修士号を取得後、ゼロックス社の研究所で研究者として職に就き、ドイツへ渡るまでの11年間をアメリカで過ごしたとのこと。ドイツでは次なる目標として博士号取得を掲げ、目標達成後はエイチシースタルクに入社し、研究開発部門の責任者として計9年間をドイツで過ごし、2004年東京支店に異動というように実にグローバルな経歴の持ち主です。自分の目標を掲げるとすぐさまそれに向かって行動する宮下氏は非常にポジティブで、何事にも前向きに取り組んでいる姿が伺えました。講演では仕事をする上で女性であることの有利な点を掲げ (図1)、大いに励まされました。また、アメリカとドイツの男女共同参画に対する考え方や社会的構造の違いなどの話があり、とても興味深い内容でした。最後に、国内に限らず、海外でも日本女性がどんどん活躍してほしい、とのメッセージがありました。

なお、今回のランチョンミーティングの参加者は全部で20名。うち男性5名、女性15名。一般会員13名、学生会員7名という内訳です。金属学会・鉄鋼協会内でもランチョンミーティングの活動はだいぶ定着してきたように感じますが、今後は男性学生会員にも奮ってご参加願います。

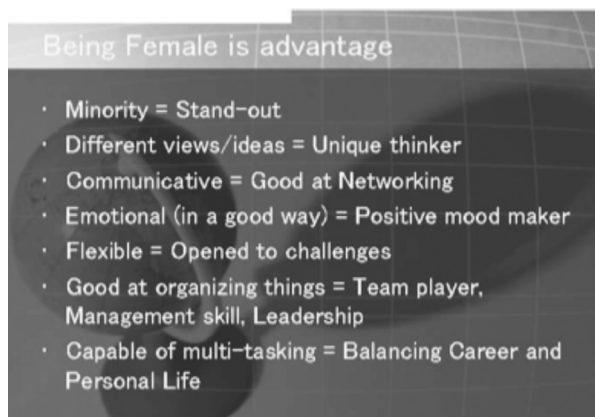


図1 宮下直子氏からのメッセージ (女性であることの強み)



図2 講演後のDr. Li (右) と宮下直子氏

\* 日本金属学会「まてりあ」Vol.54 No.9にも同時掲載

(2015年7月1日受付)